

懐から杖を取り出し、何か魔法を使ってみようとするが苦しすぎて集中できない。というか覚えていた魔法で今役に立ちそうなものが全然思いつかない。こんな海、全部氷にしてやる、と思っても自分が真っ先に氷づけになるだけだ。これはやばい。まずい。死ぬかもしれない。マジにできないことなんかないんじゃないのかよ！と心の中で組織の男に毒づき、ジュダルはひたすらもがき続けた。いやだ、こんなところで死にたくない。ジュダルにだって夢がある。世界最強の王と組んで世界征服する夢だ。こんなちまちま面白くないことやってないで、でっかい戦争を始めるのだ。そして他のマジやそいつらが選んだ王と死闘を繰り返し、最後に勝つ。最高に面白い人生になる。それなのにこんなところで溺れて死んだら、面白くないどころか史上最高に恥ずかしい理由で死んだマジになってしまふ。もう口を閉じていられなくて、そんなのいやだ、と叫ぼうとしたら水が入ってきた。

ああ、死ぬかも、とジュダルはぼんやり思う。体中が水であふれ、もう苦しいと思うことすらできない。意識が遠くなり、すうっと気持ちよくなっていく。俺は死ぬんだ。なんてつまらない人生だったんだらう。せつかくマジに生れたのに、ちっとも面白くなかった。こんなことならもっと真剣に王を選んでおけばよかった。そうしたらこんなつまらない仕事を任されることもなかっただらう。

意識の水底に沈んでいく感覚が途切れる寸前、急に腕をつ

かまれた。すさまじい力で引っ張り上げられる。自然な下降に逆らっているから不快すら感じた。やがて時間をかけて水面に出たのは分かったが、感覚は鈍く、視覚も聴覚もろくに機能しなかった。次にジュダルが意味のあることを考えたのは船の上でだった。雨でも降っているのか、と思った。

「大丈夫か？」

顔にぼたぼたと水滴が落ちてくるのが腹立たしくて、ジュダルは手で思わず蠅でも追うようにそれを払おうとした。しかし頭も体も重くて、とても思い通りに動かせない。雨はいやだ、水に濡れるのはいやだ、とひたすらつぶやいていた。するといきなり「しっかりしろ」と頬を叩かれ、乱暴に顔を拭かれた。

「髪が重いから沈むんだ。服も着たままだし」

首の下に手を差し入れられ、ゆっくりと体を起こされる。

「まだ動けないか？俺の声が聞こえるか？」

首を縦に振ろうとしたができなかった。体じゅうの関節という関節に鉄でも打ち込まれたかのように重く、頭を自由に動かすこともできない。

「沈んでからそう時間も経ってないし水は全部吐かせたから、じきに動けるようになる。しばらくはおとなしくしてろよ」
ぼんやりしていた視界がだんだん像を結び始める。紫がかった髪がちらりと見える。

「シン、ドバッド……？」